

九月十日、あずさ九号に乗りし塩尻駅に下りた。新宿から塩尻までの列車は、座席指定を得てメー
ルで互いに連絡を取り6号車に乗り込んだので、昭
ちゃん、栄子さん、如風さんと、甲府から青葉の百
姓さんも合流、私は初対面であったが、膝を交えて
歓談しながら退屈せずに三時間弱の小旅だった。

独特のアクセントで話す、ハンドル名孤狼凜さん
と、日本一の杏の里で四月十七日出逢って以来、塩
尻駅での再会であった。誘われるままに高校同窓だっ
た彼女のネット仲間を紹介され、面識もないシニヤ・
ナビと称する一行に私は飛込んで旅をしたのである。
先ず私が驚いたことがある。彼等が互いにハンド
ル名の下にさんを着けて、親しげに呼びあうのが不
思議だった。慣れたら平気になるのだろうか？不慣
な私には、それが奇異に感じられたのである。オフ
会と称する集まりでは当り前なのである。孤狼凜さ
ん、彼女を本名を呼んでいたが、馬籠の宿で遠藤周
作、狐狸庵さんと間違えて呼んでしまったほどだ。

目的は、中山道・木曾路のウォーキングであった。
最初その距離、塩尻〜中津川間約九十kmと聞かさ
れたので、全工程を踏破するのかとヘジしたが、途
中列車とバスを乗り継ぐと聞き、ままよとばかりに
参加する気になった。千曲市の杏の里の花見の際に、
孤狼凜さんとは、単に高校同窓というだけでなく、
拙著第二弾「奇妙な猫たち」のモデルとなった彫刻
家、その奥さんとも互いに面識あつて、久々に旧交
を温めたからである。彼女も勿論拙著の読者であつ
た。杏の里でも、二、三の高校時代の女性の消息を
聞かせてくれたが、今後拙著の読者となってくれそ
うな、女性同窓生の消息も更に聞いておきたかつた。

それにしても、どんな一行なのかと興味もあつた。
オフ会参加メンバーをハンドル名で記しておく。
先ず、下見を二回と入念に準備の隊長格リーダー

の孤狼凜。一行は、自ずと比較的足が達者な元氣組
と、ゆとり組に分かれた。元氣組、孤狼凜、如風、
鹿島山、青葉の百姓、私踏基の五人で、ゆとり組、
散輪坊、昭、栄子、恵美の四人である。私の場合は、
併号であり筆名であるが、踏基さんとは中々呼んで
はくれず、最後までたなかさんのままである。

第一日目、夫々塩尻駅下車の面々が蕎麦屋で昼
食後、塩尻駅(12時37分)乗車で贄川駅下車。贄川か
ら奈良井まで約8km強を歩く。奈良井駅(15時08分)
乗車で原野駅下車。木曾福島まで約6km弱を歩く。
一日目泊の民宿名は、代山温泉木曾宿である。

妻籠名の部屋で合い部屋になったのは、元柔道選
手の鹿島山、家庭菜園に勤む青葉の百姓、弁の立
つ版画家で花博士如風、踏基の四人であつた。何れ
も個性豊かな面々で時間を持て余すということがない。
如何にも堂々たる外体かたいの御二人、鹿島山と青葉の
百姓を名乗る御仁は、酒も強く共に風呂に浸かると
湯が溢れて気持ちが良い。もちろん相当に腹が出て
いる。特に、夕食の宴席で相撲甚句披露の鹿島山は
酒豪で、誕生日前祝いの一升瓶の七笑いの木曾の濁
り酒を殆ど一人で空けた。宿主人が鉄砲撃ちで熊を
射止めたという、熊の肉と馬刺を肴にしてである。
翌日、木曾福島駅(9時06分)乗車で南木曾駅下車。
妻籠宿まで約4kmを歩く。妻籠で昼食後、妻籠から
バス(12時27分)乗車で馬籠着。馬籠から落合宿まで
約7km弱を歩く。元氣組が歩いた距離は、二十数km
程度、大目にみても三十km弱だつたであらう。
中山道木曾路の旅といつても、登山とも異なりど
ちらかと言へば単歩きである。その距離は、毎朝ウォー
キング・ジョギングで鍛えている私にとって、左程

気になる距離ではなかつた。特に如風、青葉の百姓、
踏基の三人は、宿で飲んだ後アイスクリームを探し
てあても無く夜の彷徨、木曾福島関所跡辺まで余
分に歩いたから三十km弱となるのである。

此処では是非とも、アイス探しの顛末に触れておか
ねばならない。夕餉孤狼凜さん用意の、家庭菜園の
胡瓜やトマトも水気充分で美味であつたのだが、酔つ
て散会した身体は、アイスクリームを欲していた。

誰言つとも無く三人で、浴衣を着替えて、靴を穿
き木曾福島の町に躍り出た。此処は木曾の町とて、
八時を過ぎれば人の通りもなく、九時を廻れば駅売
店も戸を閉める。コンビニに行けば、アイス君に逢
えると期待、そうした店の灯りを求めて捜し歩く。

所が何処を探してもコンビニが無いのである。
旅館の売店にひよつとしたらあるかも・・・とホテ
ルや旅館に飛込んでみたが、受付の女性の姿すら
ない。路上タクシーの運転手に聞くと、確かにコン
ビニはあるという。見覚えのある木曾福島の関所跡
付近まで来て、コンビニのコの字も見当たらない
ので、もう一度探しあぐねて別なタクシー運転手に
尋ねる。こうなれば意地で、タクシー乗車してもア
イスを持って帰らねばと、三人は意固地になつた。
タクシー乗車して、国道十九号線を逆走しやつと
コンビニの灯を見つける。国道に設けられたドライ
バー族用のコンビニのようであつた。木曾福島の町
の中には、コンビニは遂に無かつたのである。
三人が持ち帰つた、九人分のアイスクリームは、
美味だった。同室の鹿島山は何故か行かないのに、
アイス二個にありついた。酔つた勢いとはいへ、ア
イス求めて彷徨つた、木曾福島の夜の思い出は終生
忘れないであらう。たかがアイスひとつであるが、
苦心談を全員が共有してくれて、彼等に親近感を
覚えた木曾の秋の出来事であつた。了